

神さまのいない日曜日

入江君人



ファンタジア文庫

1619

口絵・本文イラスト
茨乃

序章 『日曜の人達』



神様は月曜に世界を作った。

神様は火曜に整頓と混沌を極めた。

神様は水曜に細々とした数値をいじくった。

神様は木曜に時間が流れるのを許した。

神様は金曜に世の隅々まで見た。

神様は土曜に休んだ。

そして神様は日曜に――

そこはまるで墓場にするためにうまれたような土地だった。

元は肥沃であつたらう丘は荒れ果て、大きな岩がごろごろと転がっている。化石のような切り株が乾いた風に鳴き、木を刈られて丸裸にされたその丘に住むものはいない。

元の森にかえるには百年はかかるだろう。そういう土地だった。

その、荒涼とした百年を間借りして死者たちが深く眠っていた。そこは本当に、墓場にするためにうまれたような土地だった。

いま、その片隅で小さな墓守がシヨベルを振るっている。

アイは墓守で、十二歳だ。

仕事はもちろん墓の管理だ。

今も一生懸命穴を掘っている。大きなシヨベルを体いっぱいを使い、土に刃を刻み込み、テコの原理で引っぱがして籠に盛る。

膝上まで掘りこまれた地の底で、アイはふうと息を吐いた。腰を伸ばして西の空を見る。視線の先の太陽は半分傾いて、びゅうと鳴る風もだいぶ冷たい。

アイはすこし恨めしそうに落ちる目を眺め。やがて決心をつけるように掘りかけの穴か

ら飛び出した。周囲には同じような穴がいくつもあつた。

墓穴の群に加わつた新たな一つをじつと眺め、やがてアイは我慢そうに鼻息を漏らす。

「お仕事、終わり！」

誰に言うでもなく声を上げると、アイは荷物を抱えて丘を降りた。丘の下には小屋と井戸があつてアイはそこで道具を洗う。今日一日使い込んだ道具たちは真っ黒に汚れて実にくたない。

汲み上げポンプをぎっしよぎっしよと動かして道具たちを沈める。椅子とブラシを取ってきて腕まくりする。そうして準備が調つてから、アイは全部きれいにした。泥と砂を落として乾かし、必要ならば油を塗る。作業は鼻歌と共に手際よく進められ、バケツも桶も鎌も鍬も、夕日を浴びて輝いた。

そして最後にアイは自分の相棒を掲げ持つ。

シヨベルだ。

桐の柄に銀の刃をつなげたシンブルなシヨベルは、ヘッドにデフォルメされた木と根の紋が刻まれていた。それはアイが墓守であるという事を強力に証明していた。

アイは一際丁寧にシヨベルを洗った。大事に大事に優しく洗った。

井戸も小屋も道具たちも、全て村人が揃えてくれた物だ。アイはそれに報いるように丁

寧にそれらを扱あつかい。小屋にしまった。

シヨベルだけが残される。

「それではみなさん。またあした」

ぱたりと扉かじりが閉められて、道具たちは最後の光を反射した。

全てを完璧かんぺきに片付けて、ようやくアイは自分の姿を顧かえりみる。頬ほおを擦こすると泥だらけだ。その手も爪つめまで真っ黒だ。ため息を吐ついて靴くつとシャツを脱ぬいで、髪かみを解とく。

夕暮れに太陽が生まれた。

それほどまでに鮮あざやかな金髪きんぱつだった。

髪かみと肌はだは水を浴あびるだけで汚れをはじき、赤い光を金に変える。土の中の宝石が、万年ぶりに太陽の下に転まがり出たような輝きらきだった。

しかし、それを扱うアイの手つきは適あ当あきわまるものだった。先ほど道具たちに注ついだ愛情の一割も自分の体みに向けていない。水の冷たさに不平不満をこぼし、石けんの泡あわを残したままさっさと服を着てしまう。

若木のような手足をブーツと手袋てまぐさに突つつ込み、

金槌かなづちやコテが弾帯だんたいのようにぶら下げられたベルトを締しめ、

ペンや丸カンが機能的に配置されたコートを羽織はねおりる。

団子だんごにして押し込められていた髪を下ろし、麦むぎわら帽子ぼうしをのせて紐ひもを顎あごに掛かける。最後にシヨベルをぐるりと回し、背もんしやうの紋章もんしやうが前まへを向くように肩かたに掛けた。それでアイは完成した。正しく墓守むかひの装まいであった。そうして太陽がふっと向むかうの尾根おねに沈おみ。アイは家に帰るのだ。

十

今日は四十七個目の墓穴むかひを掘り始めた。明日あしたには完成させたいものだ。

そのような内容の歌詞を適あ当あなメロディにのせて、アイは山を行いった。肩かたのシヨベルをぐるぐる回まわして拍子ひょうしをとり。適あ当あなところは適あ当あに歌い、真まっ暗くらな山道を怖こわがることなく跳とぶように進む。転まぶなどあり得ない。アイはどの木にどんな鳥が住すむかさえ知しっていた。やがて山道が終わり、視界を裂きくように夜空と村が現れた。段々畑だんだんはたけがいくつも連なるその先に、明あかりを漏もらす家々が並んでいる。村は山の谷間に隠かくれるようにあって、狭せまい。

鼻歌はなうたが止やんだ。

アイはもつともらしく咳せせ払いをして自分の身みなりを確たかめる。シャツはきちんと仕舞しまわれているか。ブーツの紐ひもは緩ゆるんでいないか、汚きたいところは一いつももないか。ひとつひとつしつかりと確認かくんしていく。

そうして最後に自分の頬を叩いて気合いをいれ。そこにあつた表情を消した。墓守とは死の保護者である、死者の使者である、死神である。

その顔には無表情こそ相応しい。アイは常々そう考えていた。

今日こそは威厳を持って行くのだと、覚悟を決めて村へ向かう。

背筋を伸ばして目線を下げ、鉄と革のブーツで土を刻むように歩く。銃士隊のように掲げられたショベルは紋章の威光を見せつけ、その姿は小さいながらも確かな威圧感があつた。

不意に畑から頭を持ち上げた老人がいた。アイは気のない振りをしてちらりと目の端で彼を見た。鍛冶屋のユート翁だ。いつもみんなの道具を作ってくれる。

ユートは一瞬だけこちらを見て、すぐに畑の向こうに消えてしまう。きつと自分の威容に気圧されたのだと、アイは小さくガツポーズをした。

「おーい、みんなー。あいちゃん帰ってきたぞー」

しかしユートはすぐに戻ってきた。さらにはその声につられた村人が十人ばかりぞろぞろと現れる。みんな継ぎの入ったシャツとズボンを穿いて、頭に麦わら帽子をのせていた。男も女も老人も若者もいる。村人の多くは古傷を抱えていた。目が見えなかつたり手足を欠いていたり、普段なら畑に出ない者まで駆り出されている。春の畑はそれだけ忙しい。

みな、アイの帰りを待っていたようだ。

アイは不満に口の端を曲げたがすぐにその足を止めた。僅かに膝を折って頭を下げてショベルを掲げる。口からは墓守の文句がすらすらと流れ出す。

「みなさんこんばんは、今日も良い人生を歩まれたようで墓守として誇ら——」

そこまで言って村人に呑まれた。

「遅かったじゃねえか！ 日が暮れるまでには帰ってくる約束だろ」「腹へってねえか!!」「そうだ。お菓子がまだあつたからそれをお食べよ」「レモネードもあるよう」

威厳は一瞬も持たなかった。村人は遠慮無く頭をなで。老婆はいちいち菓子を渡し。老爺はいちいち話しかける。

アイは人々の中心でひとり気を吐く。

「お菓子もレモネードも結構です！ 今日分の食事は家にきちんと用意されていますから。皆さんも私に関わらず。自分の人生をしっかりと生きてください！」

アイは墓守の正義をしっかりと主張した。しかし村人はうんうんと聞き流して一向に解放してくれない。

「こらー!!」

そこへ遠くから声が掛かった。畑の向こうから一人の青年が腕を振りながら降りてくる。

ヨーキだ。

アイは力強い味方を見つけて笑顔になった。

「みなさんアイを甘やかしては駄目でしょうが！ ほらほらこんな所に溜まってないで、仕事ですんだら帰ってください！」

その場の全員がぎくりとして顔をそらす。先週の回覧板で「墓守様に菓子を与えないでください」と書かれた矢先の出来事であった。アイはヨーキの隣に仁王立ちして村人を睨む。目端の利くものは早々に逃げ出し、残った人間も視線に怯えて去っていった。

後には二人だけが残った。アイは勝利の鼻息をもらし、共有しようとヨーキを見上げた。「さて、アイ。……いえ墓守様！」

しかし、ヨーキは先ほど村人たちに向けた冷たい視線をアイにも投げた。

「みんなからお菓子を貰って食べては駄目だと言ったでしょう!! まったく食い意地が張っているんだから……」

その一言は聞き捨てならない。自分はきちんと断ったのだ。アイは我慢ならずに言ってやった。

「わはしはぞうよほはほろはりはした！ はひのはふへんほへっはいしへふははい！」

私は贈与のたぐいは断りました。先の発言を撤回してください。そういった内容の言葉



は誰にも伝わる事はなかった。なぜならアイの口にはお菓子がばんばんに詰め込まれていたからだ。

「……………」

ヨーキの氷のような視線が痛い。

アイはリスのような顔でしばし思い悩み。次の瞬間ごきゅりと喉を鳴らして口の中のものすべて胃に流し込んで言い訳した。

「これは不可抗力です」

「……………」

おぞましい一発芸に毒気を抜かれたのか、ヨーキは黙ってアイの手を指さした。その右手にはカップに入ったレモネード（三杯目）があり左手には菓子の山がしっかりと握られていた。体は正直だった。

墓守の象徴たるシヨベルはその辺りに適当に突き立てられている。

「まったく！ あなたという人は!!」

ヨーキは腰に手をあててがみがみと叱った。全ての村人が恐れる「ヨーキの雷」である。その説教は長く退屈だ。

しかしアイにはどこ吹く風だった。いまま右から左に聞き流しながらまったく別の事を

考えている。目の前で品良くつり上がる黒い目や、形のよい耳たぶなんかを見ている。

ヨーキは綺麗だと、アイは思う。他の人とはどこかちがう。黒目や黒髪は平凡な要素なのに、その全てに輝くような気品がある。

「ヨーキは綺麗ですね」

「は？」

説教を続けていたヨーキは思わず言葉を失う。

「……………」

「はい！ 私のおおきくなったらヨーキのお嫁さんになってあげます」

「聞いてねえ!!」

ヨーキは頭痛をこらえるように跪いて目頭を押さえた。視界から外れたアイは大急ぎで右手と左手を空にしている。

ちょうど最後のクッキーを口に放り込んだところでまた別の声が聞こえた。

「おい、二人ともー、なにやってるの〜」

見ると村を迂回する道を一人の女性が歩いてくる。

「あ！ アンナだ！ ただいまかえりましたー!!」

アイはその姿を認めると満面の笑みを浮かべて駆け出した。もはや墓守の威厳も何もな

く、走る勢いそのままにお腹に飛びついてくると回り、笑う。
 艶のある女性だった。黒髪黒目のハッキリした顔立ちに濃い化粧。さらにきつい香水をつけている。

「ん……！」

「あら、どうしたの？」

腕に抱かれていたアイが突然離れ。鼻を摘んで言う。

「アンナ、くさいです」

ぴきりとアンナの柳眉が釣り上がり、ほほほと微笑みながらげんこつを落とす。

「ア〜イ〜？ これはこうすい！ わかる？ 香水の匂いなの！ くさいなんて言うもんじゃありません！」

アイは涙目になって慌てて謝った。ヨーキの言葉なんて百万個あっても怖くないがアンナの拳は一個でも怖い。

「ま、あなたにはちょっと早いわね。大人の嗜みは大人にならなきゃ分らないものよ」
 それにはアイも意見はあったが拳が怖いので言わない。黙って頭をさすり、思う。

どうして香水や化粧なんてするのだから？ アイは圧縮された草花の香りよりも人本来が持つ匂いが好きだった。抱きしめられたときの古くなった人の匂いが好きだった。

何度か村の女性に尋ねたものだが。皆あいまいに、気まずそうに笑って「そのうちわかる」と言うのみだった。自分にもわかる日が来るのだろうか。アイにはどう考えても良い物には思えないのに。

しかし、

「ただいまアンナ。いつも綺麗だね。おや香水を替えたね？ いい香りだ」

ヨーキは慣れた調子でアンナにキスをしてあっさりとその香りを褒めた。アンナはそれは嬉しそうな笑顔でヨーキの腕を抱く。

なるほど。

アイは緑の瞳を一杯に開いて何かを学習した。

「えい！」

そして幼い嫉妬心に駆られてタックル。いちやつく二人の間に自分を押し込む。

「ちよつとアイ！ お化粧が崩れるでしょ。なあに、どうしたの？」

「あのね、アンナ！ あのね——」

アイはその日あった事をアンナに話した。四十七個目の墓穴にとりかかった事。山に新しいフクロウがいた事。みんなに貰ったお菓子の事。

「それでさっきヨーキとお話してたんですよ！」

アイにかかれれば説経もお話だった。

「あら、なんのお話？」

「あのね！ ヨーキはアイと結婚するんです！」

ヨーキが吹き出し。アンナが低い声で呟く。

「……あらあらヨーキったら、私というものがありません。こんな小さな子にまで……」

「ち、ちがう！ 誤解だ！」

ヨーキはひどく慌てて必死に釈明した。そんな夫にアンナは振り向いて笑顔を見せてやった。「冗談よ」と冷静に笑ってアイに向き直る。

「アイはヨーキとは結婚できないわよ。ヨーキは私と結婚しているんだから」

「あーそれもそうですわ」

「そのくらい知っているでしょう？ あんまり馬鹿なこと言わないの」

「じゃあアンナと結婚するというのはどうでしょう？」

「……どうでしょうの意味が分からないわ」

「アンナは知らないのですか？ 他の国では同性の結婚も認められて……」

「博識なことを言えともいってないわよ。——もう、わかったわよ。あなたがわたしたちを、結婚したいくらい好きだってことは……でもね、それならもっと相応しい言葉がある

わ」

ごくりと、アンナはのどを鳴らした。大人たちの間にいつのまにか、微妙な緊張感がわいて出ていた。

「あなたと私たちは、そう、なんとというか……」

そこでアンナは言葉を切って、傍らに立つ夫を見上げた。

「——親子、でしょ」

「ちがいます」

アイは即答した。

「お母様はもう死んじゃってますもの。わたしがお墓を掘りました。お父様は人食い玩具様ですよ。お母様がそう言いました。いつか会いにきてくれるんです」

負の感情は一切なく、アイは笑っていた。二人はそれを痛ましそうに見つめる。

「アイ」

アンナはアイを抱きしめた。アイは驚いて固まってしまった。

「アイ、あなたのお母様はアルファ様ただ一人よ。そしてあなたのお父様はきつといつか来て下さるわ。——でも今はいないから、しばらくの間——ほんの少しの間だけ。私にお母さんをやらせてはくれないかしら？」

アンナの声は震えていた。

「……アンナがお母様？」

アイはびっくりしてもう一度言ってみた。「アンナお母様」その言葉は角砂糖のように簡単に溶けて心にしみこんでいった。

「アンナお母様！」

きゃっきゃとはしゃいでアンナに抱きつく。そしてはっと何かに気付いて振り返る。

「じゃあヨーキはお父様!？」

「そうなるだらうね」

お父様！ お母様！

アイはプレゼントを買った子どものようにアンナお母様、ヨーキお父様と連呼した。

「……さ、それじゃあ家に帰ろうか。腹べこだ」

腹ぺこ！ とアイは叫んで右手でアンナを、左手でヨーキを捕まえる。二人の真ん中で嬉しそうに笑い、引張るように家路を急ぐ。村から少し離れた小さな家、そこに三人で帰るのだ。

「ところでアイ」

ヨーキがアイの手を指さし、言った。

「シヨベルは？」

右手には母、左手には父、アイの両手は大事な物を掴むのに忙しく。墓守の象徴はすっかり忘れられていた。

前章 『神話を愛する人のために』



神様は月曜に世界を作った。

無すらなかつた場所に有と無ができた。

神様は火曜に整頓と混沌を極めた。

自由と不自由が定義され、根本的な方向性が決まった。

神様は水曜に細々とした数値をいじくった。

細かく、面倒な作業は素晴らしい多様性を産んだ。

神様は木曜に時間が流れるのを許した。

値は爆発的に広がって原初のスープが生まれた。

神様は金曜に世の隅々まで見た。

億の時間が過ぎ去って、世界は理想的な広がりを見せた。神様はその世界を愛した。

神様は土曜に休んだ。

空間が光と共に百億も過ぎ去った。

そして神様は日曜に、世界を捨てた。

十五年前、神様は突然人の前にあらわれて言いました。

「あの世はもはや満杯だ。この世もすぐに行き詰まる。ああ失敗した」

その言葉だけを残して神様は消え、当時この世の春を謳歌していた人間は驚いて震えました。種族として一億年も生きていない彼らが神様に会ったのは初めてのことでした。その初めての言葉が、別れの言葉だったのです。

その日から人は死ななくなりました。

心臓が止まっても肉が腐っても。死者は蠢くのを止めませんでした。

その日から人の子どもは生まれなくなりました。

工場の火が落ちたように、新しい人は作られなくなりました。

神様のいなくなつた世界で人は絶叫しました。億の絶叫は血を吹き出して瀕死になるまで止みませんでした。生きている人はあつという間に少なくなりました。世に死者が蔓延りました。

そして墓守が現れました。

墓守は神様が人のために遣わした最後の奇跡でした。

年を取らず、疲れを知らず。人の望む最高の体を与えられた彼らはふらふらと動き回る死者を埋め、墓を作って生者の安息を守りました。そうされてやっと、人は安らかに眠れるようになったのです。

「人の眠りを守るもの。それが墓守なのです」

ヨーキはベッドの枕元で何百回と繰り返してきた物語をかたった。この後に——アイ、あなたも墓守の一人として皆の眠りをしっかりと守るのですよ。と結んで終わる。いつもの物語だった。

「アイ？」

しかし今夜の物語はそこまでだ。

その部屋は宝物で満ちていた。

アイの持つ道具たちとおなじく、この部屋もすべて村人の手作りだった。ベッド、棚、机、その全てを飾るようにプレゼントされた小物が並んでいる。熊のぬいぐるみも新品のスコップも全て等しく飾られていた。

その中心で、アイは幸福な寝息をたてている。

ヨーキはやれやれと呟き、本を閉じる。

「おやすみなさい、アイ。……今日もお疲れ様です。本当にありがとう」

布団を掛けてやり、頭を撫でて、ヨーキは部屋を後にした。

「もう寝た？」

扉の向こうのリビングではアンナが食器を片付けていた。髪が邪魔にならないようにと結び上げ、家庭的なエプロンをしているのが意外なほど似合っていた。

夕食はささやかながらも豪華なものだった。肉料理が二つも並び、食後にはケーキまで出た。

「話の途中でぐっすりさ。食べ過ぎたつてもあるけどね。……今日はありがとう」

ヨーキは妻の肩に手を置いて労をねぎらう。手間の掛かった料理には今日という日の覚

悟が見られた。アンナは振り向いて不安そうに言う。

「ねえヨーキ、本当に良いの？ 私が母親だなんて……本当に良かったのかしら……」

「もちろんだよ。村のみんなだって賛成したろ？」

ヨーキは優しく微笑み、妻の肩を叩いた。

「むしろ引き受けてくれた事に感謝している。母親なんて大変な役目だ」

「そんな、私は良いのよ。あなたの事は愛しているし。こんな時代に子供を持てるなんて夢のよう……。私いま、怖くなるほど幸せよ」

でも、とアンナは不安な表情を浮かべた。

「あなたたちにとって……それは幸せかしら……」

「どういう意味さ」

「最近そんな事をよく考えるの……あなたとアイにとっての一番の幸せはなにかって」

アンナはなんだかよそよそしく、ヨーキの手を逃れて窓に寄り、カーテンを開いて向こうに見える闇を見ている。

「あなたたち二人はある日、この村を出て行くの。手に手を取って、全部の誤魔化しを捨てて……そうして別の土地に暮らして四、五年たてばアイは年ごろよ。きっと美人になるわ。そしてあなたを好きになるの……それが一番自然で……幸せな道よね」

「またそんな事をいって」

ヨーキは妻を振り向かせてキスをした。

「その道には大切な前提が抜けるよ……僕が愛しているのは君なんだ。アイじゃない」

「そ、そんな事言って数年たったら分かんないわよ。私なんてこれから衰えていくばかりだし。アイはどんどん綺麗になるだろうし……」

「アンナ」

ヨーキは態度で全てを示すように彼女を抱きしめた。

「信じてアンナ。健やかなるときも、病めるときも、君を愛し、君を敬い、この命ある限り、真心を尽くすよ」

その手に口づける。

「——そうして僕の命が尽きたなら。一緒に眠ろう」

死者が歩くこの世界で。死後、無様にさまようことなく同じく墓に入ろうと、ヨーキは誓った。

「……うん」

返事を聞いて再び抱きしめると、腕の中の体がようやく緊張を解いて柔らかくなる。

「落ちて着いた？」

「うん」

言葉と共にアンナはするりと抜け出した。あたたかいそこに一瞥もくれず、淡々とストールを纏い、バッグを拾い上げて帰り支度を始める。

「帰るのかい？」

「ええ、本当は泊めてくれてみっともなく頼むつもりだったけど……そんなこともう言えないわ」

信じてと、言われたのですもの。とアンナは弱々しく微笑んだ。その笑みを痛ましく思つてヨーキは思わず言ってしまった。

「……一晩くらいなら、村のみんなも……」

「だめよ」

アンナはびしやりと遮った。

「あなたがそんな事を言つては示しがつかないもの……もう行くわ」

きゅつと夫の手を握り。アンナは玄関の扉を開いた。

と、同時に子ども部屋の扉も開いた。

「……………アンナ——帰っちゃうんですか？」

そこにはアイが、眠い目を擦って立っていた。

「あら、起こしちゃった？」

大人二人は「困ったな」と目線を合わせる。その困惑の間をアイは駆け、

「……アンナ、帰っちゃ嫌です……」

そう言い、小猿のようにアンナのお腹に引っ付く。

「ちよ、ちよつと！ そんな泣きそうな顔しないの。いつもの事でしょう？」

「でもアンナは……今日からお母様なのに……」

眠気と、あまりに楽しすぎた今夜のせいでアイはすっかり寂しくなってしまったようだ。しかたなく、ヨーキはその肩に左手を置く。

「ほらアイ。アンナを困らせてはいけないよ。いつも一人で寝ているだろう？」

「でもお母様は……同じ布団で……一緒に寝るものですよ……」

ひとつ、濃いため息を吐く。

「アイ」

ヨーキは怒るときに使う固い声を出して手に力を入れた。

「ちよつとアイ。どうしたのよ。あなた、こんな我が儘を言う子じゃないでしょ？

ねえ、

お願いだから困らせないで……」

「アイ、すぐに寝なさい」

しかし、あやしても怒っても、アイは俯うつむいてうんともすんとも言わない。

新米の父親は叱しちかっていいのかすら分わからず。母親は驚おどろきと腰こしの痛いたみに固かたまっている。

「痛いわアイ！ 放はなして、お化粧けいようが……」

やはり叱しちかろう。

ヨーキはそう決意してアイの肩かたをぎゅうと握にぎり、平手ひらてを高く持ち上げたその時だった。

アイが、緑の瞳ひとみを一杯いっぱいに開ひらいて大人たちを見た。

その瞳ひとみは涙なみだをいっぱいにためてずぶ濡ぬれになっていた。だというのにその色は飢うえに苦しあみ、乾かわいていた。

この目はなんだ？

ヨーキは悪寒おろかを覚えて凍こり付ついた。なにか、とても重要な事柄ことごとが起おきていることは分わかった。しかし具体的に何が起おきているのかさっぱり分わからなかつた。こんな事はいまままで一度だつてなかつた。こんなアイは初めてだつた。自分おのれの中なかでのアイはもつと賢かしこかつたはずだ。自由奔放じゆうほうでいながら、いつも大人たちが本ほん当とうに求もとめている事を嗅かぎ取り、我が道みちを行いくが我が儘ままを言いわず、怒おこられはするが叱しちかられず、困こまらせはするが煩わづらわせない。そんな子供こどもだと思おもっていた。

その子がいま、我が儘ままを言いっている。煩わづらわせている。全身ぜんしん全ぜん盪たうでなにかを訴うたえている。今いますぐに動うごく必要ひつやうを感じた。ずつと先延せんえんばしにしてきた何かの清算せいざんを迫せまられていたとわかつた。

だというのに、やはり、ヨーキは動うごけなかつた。ただ拳こぶしを握にぎって立ちつくしていた。

少すこなくない時ときが流ながれ、凍こっていた時間じかんは溶とけるのではなく腐くさるように動うごき出した。

アイはゆつくりと、全てを諦あきらめたようにアンナを放はなした。体からだから力が抜ぬけ落ちて、機は会は永久とこに失なわれようとしていた。それでもヨーキは動うごけない。

そうしてアイの瞳ひとみに残のこった最後の光ひかりがこぼれ落ちる寸前すんぜん、となりの空そら気が動うごいた。

アンナがふわりと屈かがみ込んでアイを抱だいた。あんなにうるさく言いっていた服ふくも化粧けいようも一切いっさい気にせず頬ほおを寄よせ、その胸むねに娘むすめを包かんだ。

母親ははのように。

「アイ」

別人べにんのように落ち着おいた声こゑが娘むすめの名なを呼よぶ。それだけでヨーキにはどうする事も出来できなかつたアイの絶望ぜつぼうが消きえた。

「お母ははさんはあなたと一緒に眠ねる事は出来できません」

優しく撫でられながらアイは不満そうに眉を寄せる。

「でもずっと側にいるわ。ずっとずっといつまでもあなたのお母さんよ。ね？」

「……でも」

「あら、信じられないの？　こんなに大きくなったのに、しょうがない子ねえ……」

それを聞いてアイは急に恥ずかしくなったのか、顔を赤くしてむずむずと動いた。

動かないで、とアンナはいい。ハンカチを取り出して涙と鼻水を拭う。それがますます

恥ずかしいのか、アイはハンカチを奪って自分で拭う。

「もう平気？」

「……はい」

「一人で寝られる？」

「はい」

「本当？　あ、そうだ、なんだったらヨーキと一緒に寝て貰えばいいわ」

「いいです！　平気です！　おやすみなさい！」

そう言っただけでアイは逃げるように部屋に帰っていった。アンナがそれを、なんの心配もないで見送っていた。

「……いったい何がどうなったっていうんだい？」

ようやく膠着がとけたヨーキが首を捻った。アンナがこちらを見もせず言う。

「……さっき、あの瞬間に、私はあの子の母親になったということよ」

「つまり？」

「分からないの？　男親ってほんとだめね」

「面目ない」

「ふふふ、いいわ。あなたにだってそのうち分かる日がくるはずだもの」

「だいたいけど……」

結局自分は何も出来なかった。その思いはじくじくとヨーキを責めた。

「ヨーキは知らないかしら？　ひとつの家族が出来るときに、父親ってのは一番あとに自覚するんですって。……まず、子どもが出来て、膨らんだお腹に母親が自覚して、最後に父親が気付くんですって。だから心配する事ないわよ」

アンナはそう慰めて少し笑い、小屋を出て行った。そこにはもうなんの不安も弱さもなかった。

ヨーキはなぜだか二人に置いて行かれた気がして少し寂しかった。

やれやれと頭をふるい、食卓に残っている酒器を片付け始める。すると手に持った杯が少し重い。見るとグラスの底に濁った酒がとろりと残っていた。

じつと、酒杯しゅぱいの中の自分と眼めがあった。その眼は罪悪感に濁にごっていた。ヨーキは少し迷まよって、飲み直す事にした。残のこった酒瓶さかびんを取とって手酌てしやくでなみなみと注つぎ、全く無くすつもりで喉のどを鳴ならす。

アイには母親ははが出来た。アンナと自分には子どもが出来た。村のみんなが賛成さんせいしてくれた。喜よろこばしい事だ。

だというのにこの酒のまずさはなんなのだ。

杯かを替かえてもう一杯ばい。やはり酒はまずかった。いや酒ではない、飲む人間がまずいのだ。まったく酔よった気がしないまま酒が尽つきた。さすがに新しく酒瓶さかびんを開あける気にはなれず、ヨーキは眠ねむってしまおうと自室じしつへ向むかった。その途中とちゆう、アイの部屋へやに差し掛かかる。

引き寄せられるようにその扉とびらの前に立ち、うすく開あいた、そこでは小さな墓守むかひが本当に幸さいせそうに眠ねむっていた。

それを見てヨーキは少しだけ救すくわれて、扉とびらを閉とめた。

「アイ」

おやすみなさいと言いうかわりに、その言葉を投なげる。

「……本当にごめんさい……」

II

ざくりと、アイは墓穴むくわの底そこにシヨベルを突き立たてて預あげ、タオルを取とって首筋くびすぢを拭ぬった。春の陽気はるがけもあいまってずいぶん汗あせをかいていた。水みづをぐくりと飲んでドロップどろっぷを口に放はなり込む。収まりおさまりの悪いわるいそれをころころと転ころがすと途端とたんにイチゴの甘みあまみが広がひろがった。

イチゴは好きだ。甘いから。

よしと気合きあいを入れてシヨベルを取り、穴あなの中で向きむきを変える。お昼ひるまでがんばったおかげで膝頭ひざがしらまでしかなかった穴あなが腰こしの辺へりりにまで深ふかくなっている。

その一角いっかく、アイが先まほどまで向むかっていた場所ばしょだけがあからさまに深い。
(変へんな事を考かんがえていたから熱中ねつちゆうしてしまいました)

アイは小さく肯うなずいて反省はんせいをし、穴掘りあなほりに戻もどった。けれど単純たんじゆんな肉体労働りくたいらうどうは頭にいらぬ暇ひまを押おしつける。

どうしてヨーキは、眠る私わたしにあやまるのでしょうか？

たまに、ヨーキはあんな風に酔ようときがあった。

たまに、アイは月明かりの下で夜更かしして本を読むときがあった。

たまに、それが噛み合うときがあった。

きい、と扉のきしむ音を聞いて瞬時に本を枕の下に突っ込んで狸寝入りをする。「アイ？ 寝てますか」の声に寢息で応えてやり過ごそうとする。「はれてますよ」とか「早く寝なさい！」とか言われないかどきどきしながら息をひそめ、じれったいような視線と僅かな床の軋みを聞きながら待ち、やがて望んだとおりにヨーキが去る。その最後の瞬間に彼は言うのだ。

ごめんさい。と、

そんなことがもう何度もあった。

「なんなんでしょうねー」

ぼこぼこ粘土を崩しながら呟いた。

ヨーキは私に、なにか謝ることをしている。それもずっと。

小さな違和感は様々なものを引っかけて育った。それに気付いてしばらくして、ヨーキや村のみんなが自分を墓守として扱う時にふと「変な感じ」を覚えるようになった。彼らはアイの仕事をよく邪魔する。昨夜のようにお菓子をくれたり世話を焼いたりして自分やヨーキに怒られている。

もしかしてみんなは、自分が墓守として振る舞うのを望んでいないのではないか？

そう、アイは考えるようになった。

一つに気付くといろいろな事が目につき始める。

それからよくよく注意して観察すると、村のみんなも、どこかうっすらと、謝っている事に気が付いた。お菓子を分けてくれるときに、なにか世話を焼いてくれるときに、頭を撫でてくれるときに、みんなの目が一瞬だけ謝ってくるのだ。

村が自分を騙そうとしている。

それを知って、アイはもう、なにも聞けなくなった。

みんながみんな、示し合わせて隠し事をしている。おそらくはずっとずっと昔から、母が死んだときから村人総出で隠した事があるのだ。

二年も前にそれに気付いたときアイは「騙される」ことにした。

自分はなんにも気付いていない、そんなふりをして生きていく事に決めた。

当たり前だ、もしも蜂の巣を突っついてしまったらどうする。自分にはこしかなないのだ。ずっとそう、求められてきたのだ。保護者さえ、昨日まではいなかったのだ。嫌な事は嫌なのだ。

自分はじつに賢く考え、そしてしっかりと決断を下した。そのつもりだった。

ふうと、吐きだされた溜息が地面に落ちた。
でも自分は、墓守で十二歳だった。

十二歳。それは十歳とは違うという意味だ。もう子どもではない、もはや大人といつても過言ではないのだ。

私はなにをどうすればいいのでしょうか。なにをどうしたいのでしょうか。

いま、アイは誰の目も意識せずに深く考えに沈んでいた。普段の笑顔はなりをひそめて、無表情が張り付いていた。

「あーもー!」

ざくつとショベルの落ちた先を見てはっとした。また同じ所ばかり掘っている。

手を休め、何となくホコリを払って麦藁帽子の位置を直し、深呼吸して体を伸ばす。曲げっぱなしだった腰からべきべきと思いの外おきな音がしてびっくりする。十二歳にしてこれは勘弁して欲しいと思う。

アイはひとしきり柔軟体操をして視線を丘の上に向けた。だいぶ低くなった地面の先に墓がいくつか並んでいる。こちらにはきちんと中身が入っていた。

「……どうすれば良いのでしょうかね。お母様」

死者が当たり前に出歩くこの世界で、しかし墓の主は返事をしない。彼女は甲わられて、

永久の眠りについたのだ。他ならぬアイの手によって。

ふと、やる気が無くなってしまふ。アイはショベルを放りだして穴の縁に腰掛けた。見上げると春の薄雲がゆっくりと流れていた。間の抜けた一握りの雲が群から離れて小さくなっていく。

視線をかくんと落とす。明るいものを見過ぎたせいか、墓穴は異様に黒く、深く映った。こんなもの、掘ってなんになるというのか?

アイは墓守だ。生まれたときからそうであり、母が死んだ五年前からはひとりで村に就いている。墓守の役目は死者を弔い、生者を慰めることにある。出歩く死人があれば大地に還し。嘆く生者に墓を与えて慰める。

だがアイは一度しかその役目をやった事がない。その一度が母だった。七歳のアイはなにも分からないまま、村人に言われるままにショベルをふるうだけだった。

その時の事は、あまり覚えていない。ただ何か強いられるように誰かの指先に従ってショベルをふるった気がする。詳しいことは本当に、なにも覚えていない。本当だ。

自信なんか一つもなかった。

自分は墓守だ。それは信じている。でも他者から見ても、自分は墓守だろうか? 一度しか葬儀を執り行わず、持つべき指標もない。

だからアイはこんなところで四十七個も墓穴を掘っている。

墓穴なんて、本当は死者が出てから用意するものだ。四十七個も先に掘って良い事などひとつもない。冬には雪が、春には植物の種が入り込んで埋めようとする。野鳥が巢を作った事もあった。自分が真にすべき事は日々の勉強であり、じっと待つ事である。

しかし、そんなことには耐えられなかった。アイは、自分は墓守である。という自負を慰めるために何かをせずにはいられなかった。春に一つ、夏に一つと穴を掘り、そのスピードは体の成長に合わせて速まり、いまでは三日で一つ掘る。

そうして四十七個目。もう一振り二振りですれが完成する。アイはシヨベルを握り直して躊躇った。ここを完成させて、次はなにをしよう？ 墓穴は掘った、棺桶は作った。では次は？

それを考えると手が止まる。

アイはじつと墓穴の底を見た。ここには誰が眠るのだろうか？

ユートかダイゴか、アンナかヨーキか、それとも、

墓穴を掘り、棺桶を用意し、全ての準備を整えてなお、アイは死を知らない。

「私はその時になって……きちんと墓守でいられるのでしょうか」

その時になって……とアイは繰り返した。

雲は気ままに流れて答えを返さず。死者は眠るのに忙しい。

誰かの声が聞きたかった。そう思ったとき、空のどこかでヤマガラスがグアーと鳴いた。

アイはぼかんと空を見上げる。なんだか途方もなく馬鹿にされた気がして立ち上がり。

八つ当たり気味にシヨベルを持ち上げてやけくそな一振りを大地に差し込む。

†

昼をまわった頃に墓穴は出来た。出来てしまった。

アイは全ての墓穴を点検し、ことさら丁寧に道具を洗って時間を潰した。早く終わったから早く帰るなんてことはしたくなかった。

それでも二度目の休憩時間には全ての仕事が終わってしまい、夕方というには早すぎる時間に墓場を後にした。帰路は憂鬱だった。なにも決まったことはなく、明日やるべき仕事もない。村人に聞いても、きつと「何か」が邪魔をする。

憂鬱は山を出て村に差し掛かるまで続き、終わった。唐突に村に着いたと思ったら、心が勝手に嬉しくなってしまったのだ。

なにせ家には家族がいるのだから。

家族！ なんて素敵な響き。頬がにまにまとゆるむのをとめられない。今朝は目が覚め

てびっくりした。アンナが夜明け前からいて、自分を揺り起こしてくれたのだ。そして朝ご飯とお弁当を作ってくれていた。きつと今頃は夕食を作っている。アンナは味付けが下手だから。一緒に手伝えば喜んでくれるにちがいない。

アンナは本当にお母さんのようになった。ひょっとすると本当のお母様よりもお母さんらしいかもしれない。

ヨーキは……。

んーっとアイは唸った。父親というものについて、アイはまったく知らない。

——あなたの父親は人食い玩具よ。いつか必ず会う日がくるわ。

父について、母はそれしか言わなかった。それがつまりどういう事かはよくは分からないけれど。アイはそれをずっとおぼえている。父親についてはやはりよく分からない。

「かえろ」

誰にもなく呟いて、アイはにまにまど笑いながらスキップしそうな歩調であるき始めた。アンナの料理を思い浮かべてふんふんと鼻で歌いながら上の空で行く。

だからすぐには気付かなかった。

「？」

おかしい。

畑に誰もいない。

ここまで一人の村人とも出会わなかった。この忙しい時期になぜみんな畑に出ていないのだろう。それになんだか変な匂いもする。火薬の匂いだ。虫封じにはまだ早いのに。

アイは奇妙に思ったが、だからといってなにか気づく事は無かった。変だ変だ、と首を傾げるだけでいつものように近道をして家と家の間にある庭のような道を曲がる。

「おっと」

そこで誰かにぶつかった。

とん、と軽い音をたてて誰かの胸に頭がぶつかる。互いによろめいて数歩後ずさり、運命と出会った。

すさまじく美しい少年だった。髪は銀糸、瞳は紅玉、肌は水。華奢な体つきは純正の白化個体。だがその所作に虚弱の気配はまったく無かった。細く小さな体には力がたゆたい、瞳からは王の様な重圧が漏れている。

その体はアイと同じようにいくつもの道具で鑑われていた。ブーツもパンツもコートもその全てが黒く、衣服と言うより武器に見える。

実際それ以外は全て武装だ。目に見えるだけで手投げ弾三発とハンドガン一丁。右肩にサブマシンガンを一丁吊ってある。重たそうなコートの下にはいったい何が隠れているの

か見当もつかない。

そして右手にショットガン。

その銃口がいま、目の前にあつた。

アイがぼうっと眺めている間に、少年は最速で戦闘状態に移行した。

ポンプアクション式のソードオフ改造ショットガン。アウトサイダーの一品物。山野で獸を撃つために設計されたそれは街で人を撃ち殺すために最適化されていた。

手遊びにベンを回すように銃はまわり、左手がある場所にスライドが収まり、追って右手がトリガーを握む。一瞬で照準。当たり前のように頭。

シャキンと軽い音をたてて装填が完了した。脇を締め、目線を絞る。人差し指が曲がる。そして集中から来る虚脱がぼうっと狙いをさだめ、

「失礼」

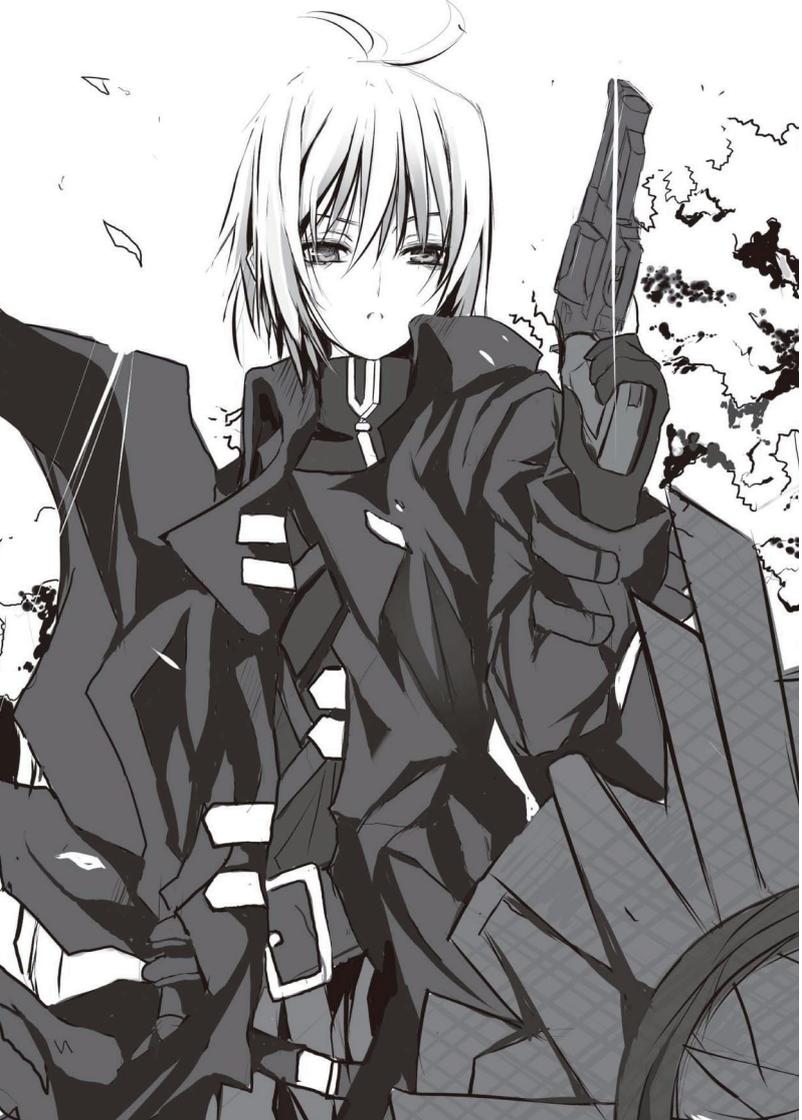
銃口はあつさりと外され、人と人がぶつかったときそうするように少年は謝まった。

アイも慌てて頭を下げ、ごによごにと呟く。

じゃなくて……いま……あれ？

「おまえ、この子？」

アイが何か言う前に少年が質問した。開きかけた口を閉じて、こくんと肯く。



「ひとり?」

肯く。

「喋れねーの? それとも馬鹿?」

「しゃ、喋れますよ!」

慌てて口を開いた。美しい外見とは裏腹に、少年はひどかった。

「そりゃよかった。んで、お前何者?」

少年の笑みは獲物を前にしたネコのような笑顔だった。

「私はアイ。墓守です」

へえ、っと少年の赤い瞳が細まる。しゃがみ込んで視線を合わす。

「な、なんですか」

シャツが出ていただろうか? それとも靴紐か!

「お前が? この村の墓守?」

少年がよく切れそうなくらい視線でアイを見る。

「……なにか文句でもありますか」

「いや別に。……ま、どうでもいいか。それならそれでちょうどいいしな。ちょっと聞

きたい事があるんだけど。良いか?」

アイは肯く。

「質問、検査」

少年が言っただけのまま待つ。アイは戸惑いながらも先を促した。

「ハナと呼ばれる、あるいは名乗る人間について問い合わせたい。生死は問わない」

アイはあっさりと言を横にふる。その反応に少年はまたも怪訝そう顔をした。

「追加検査、以下の特徴を持つ女について問い合わせたい。年は三十から四十。茶髪黒目

でハッキリした顔立ち、背は俺と同じくらいで胸は小さい。これも生死問わず、だ」

少年は奇妙な定型で質問を作った。

アイは翻弄されながらも考えた。若い女性などアンナしかない。そしてアンナの胸は

大きい。お墓にもそんな人間はいない。

首をふる。

「……では曖昧検査、先の特徴の一部でも合致する人間は。……生死問わず」

アイは何人かの名前を挙げる。それに対し少年がいくつかの質問をする。候補はあつと

いう間に少なくなり、ゼロになった。

「……はづれか」

そういってため息を一つ吐き出し、少年は立ち上がった。躊躇うことなく背を向けて歩

き出す。

「ちょ、ちょっと待って下さい！」

「あん？」

アイはたまらず呼び止めた。一方的に聞くだけ聞いておいてその態度はないと思う。しかし少年の足を止め、振り返らせても何を言っているのか分からない。

「なんだよ？ 俺は忙しいんだが……」

秀麗な顔が不可解そうに歪む。美形はこんな顔でも綺麗なのだなと、アイは思った。

何か言わなくては！

「き、綺麗ですね！」

間違えた。ただの本音だった。

少年は一瞬だけ固まり。アドリブのきく役者のように「ありがとう」と慇懃に言った。

「他には？」

「ええと……あなたは、そうですね！ あなたは誰ですか！」

「俺？ ああ、名乗ってなかったか。そうだな……おれは」

少年はとっておきの冗談を言うときの顔で笑った。

「人食い玩具さ」

「分かりました！ ハンプニーハンバートさんですね」

「まてい！ 納得するな！ そんな名前の奴がいるわけねえだろ！」

人食い玩具はつつこんだ。

「は？ でもそう名乗ったじゃないですか……」

「ちょっと小粋なジョークだよ！ じゃあなにか、お前のまわりに人食い玩具なんて

名前の奴いるのか!？」

「あ、お父さんがそうですね」

はあ!? と、美術品のような顔を安っぽく歪ませてハンプニーはメンチを切った。そして急に静かになる。

「……おまえ親いんの？ んでなに、親父は人食い玩具って言うのか？」

「そうですね。お母様が亡くなるまえに教えてくれました」——あなたの父親は人食い玩具よ。いつか必ず会う日がくるわ」と

ん？

「まさか」

符合は完璧に一致する！ アイはびしっと指さした。

「お父様!？」

「なんでだよ！」

ハンブニーは大いに叫ぶ。

「どんな思考回路だ、てめえ！ どうやったたら俺がお前の親父に見える!？」

アイははたと気付いて首を傾げる。

「たしかにおかしいですね。ハンブニーさんは十七、八歳にしか見えませんし……」

「……まあな」

「私の想像するお父様は四十前後のタフガイですから。登場シーンも雄叫びを上げてなにかと対決していないとおかしい」

「……おかしいのは絶対にそこじゃないと思うが……」

「まあ、そんなのは小さな問題です」

「お前はちょっとビッグすぎるな」

「お父様はお父様です」

「へー、なんで？」

アイは自信満々にいった。

「運命を感じました。直感です」

これ以上なんの説明があるのか？ とその瞳は語っていた。ハンブニーはうんざりとし

た様子で、

「……お前、俺と会話する気ないのか？」

「そんな事ないですよ。お父様」

「お父様——ね」

ハンブニーはその言葉を小さく繰り返した。赤い瞳がアイと村を交互に見て何かを思案するようさまよっている。アイはまた何か聞かれるのだろうかと身構えた。

「ま、いっか。好きに呼べよ」

しかしハンブニーはあっさりとして全てを放り捨てた。振り返り今度こそ立ち去る。

「どちらに向かうのですか？ お父様」

「……………」

アイは当然追いつがる。ハンブニーはため息を吐く。

「お前さー墓守だっけか？ それって本当なのか？」

何を当たり前の事を言っているのだろうか、アイは黙って首肯した。ハンブニーは胡散臭そうにため息をもう一つ吐いて。にやりと笑った。

「そんなに言うなら仕事を一つ頼もうかな。墓守様」

「なにをですか？」

「そりゃ墓守様に頼む仕事は決まってるだろ」

ハンブニーはみなまと言わず。にやにや笑いで歩き出す。コートすその裾ひるがえを翻し、細い足を素早く前後させてアイに駆け足あしをさせた。

そうして村に入り、大通りに出る。

そこでみんなが死んでいた。たぶん死んでる。なにぶん死体を見るのは初めてだし、こんなご時世だから確信は持てない。でも頭が無ければ普通ふつうは死んでいると思う。

朝に通った道はずいぶんと変わってしまった。壁かべには弾痕だんこんが刻まれて破けた柵さくからにわとり鶏わとりがこけこけと逃げ出している。倒壊うちかいしている建物すらあった。

その景色の至る所に死体、死体、死体。みんな見た事もないような険しい顔で銃器じゅうきを抱かかえて死んでいた。

ぺたんと腰こしが抜ける。

「埋うめてやってよ」

ハンブニーが言った。

その言葉はアイの一番深い場所を刺激しげきした。とにかく何か支えが欲しくてその考えに組かみった。

死者は、埋葬まいそうするもの。

それが墓守の思考のはずだ。

その時が来たのだと思った。自分が墓守として試されるときが来たのだ、と。

つづきはファンタジア文庫『神さまのいない日曜日』で！

©Kimihito Yrie,Shino